

認知症の医療や介護に功績のあった人や団体に贈られる「日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞」(日本認知症ケア学会主催、読売新聞社特別後援)の第13回受賞者が決まり、5月26日、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで授賞式が行われた。長年の取り組みをたたえる功労賞に2人、現場での活動を評価する実践ケア賞に1人・2団体が選ばれた。

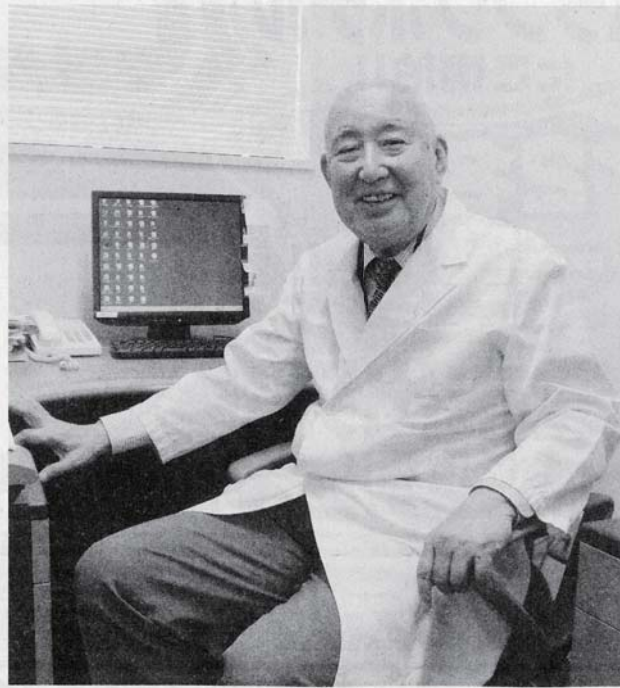
日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞

▽選考委員長 今井幸充(和光病院院長)▽選考委員 池田恵利子(あい権利擁護支援ネットワーク理事)、長田久雄(桜美林大学教授)、落合恵子(作家)、加藤伸司(東北福祉大学教授)、中村祐(香川大学教授)、堀内ふき(佐久大学長)、涌波淳子(特定医療法人アガペ会理事長)、猪熊律子(読売新聞東京本社社会保障部長)(敬称略)

【主催】 日本認知症ケア学会
【特別後援】 読売新聞社
【後援】 厚生労働省、沖縄県、宜野湾市ほか
【協賛】 エーザイ

広島大名誉教授・
洛和会京都新薬開発支援センター

中村重信さん 78 (京都市)



今も新薬開発の最前線で活躍している中村さん(京都市で)

功労賞

認知症治療薬の研究・開発に、長く携わってきた。京都大医学部の助教時代から、その歳月は40年近い。「医者として、薬で治したいという思いが強くてね」。治療への情熱が、研究生活を支えてきた。

それは今も変わらず、「アルツハイマー病になってから治すという発想を転換し、ならないための新薬の開発に取り組んでいるんです」と意気込む。患者と関わり続ける中で、薬の治療だけでは不十分なことも実感した。「認知症本人への支援はもちろん、家族への支援も大切だ」との考えから、「認知症の人と家族の会」(京都市)の活動にも積極的に参加し、現在は顧問を務めている。

その経験から、家族への支援で特に大切だと感じているのは、同じ立場の人たちが情報交換をする場を設けることだという。「終わ

研究40年 家族支援にも力

りが見えない介護に向き合っている家族が燃え尽きてしまわないよう、私たちの会では、上手な息抜きの仕方など、負担を和らげる過ごし方について、みんなが知恵を出し合っている」と話す。

今年4月に京都市で開かれた「第32回国際アルツハイマー病協会国際会議」では、組織委員長を務めた。同市で2004年に行われた時に比べ、今回は、アジアやアフリカの国々からの参加が増えている状況に驚かされた。

認知症は、欧米や日本だけの問題ではなく、すでに世界規模で解決すべきテーマとなっている。「日本の介護にも様々な課題は残されているが、今後は、途上国での認知症ケアの仕組みの構築など、グローバルな視点で介護の問題を捉えていくべきだ」。医師として、研究者として、決意を新たにしている。